

特集「音楽情報科学」の編集にあたって

松 島 俊 明[†]

音楽は、他の科学技術分野と比べても早くから計算機の利用・応用が進んだ領域であり、1957年にはすでにコンピュータによる自動作曲「イリアック組曲」が発表されている。このように芸術分野の中では理論的な解析に馴染みやすい対象であり、計算機の利用あるいは可能性を試みる領域として、いち早く注目されてきた。以来、音楽とコンピュータの接点における研究・開発は、実験的な音楽、最近では、エンターテインメントやホビー領域として定着したコンピュータミュージック領域におけるニーズに答える技術として発展し続けている。特に、近年のマシンパワーの増大に支えられる形で、セッションシステムや演奏ゲームなどインタラクティブに関する技術開発もさかんに行われている。また、聴覚や認知を考究するため具体的対象としても取り組まれ、具体的な成果が上がりつつある状況にある。

このような状況の中、音楽情報科学研究会は1993年に発足以来、国内における計算機と音楽に関する研究の中心的存在として活動を行っており、年5回開催している研究発表会では50件以上の研究発表が行われている。このほか、研究支援活動も含め積極的に活動を行っており、1993年には、コンピュータ音楽の分野で最も権威ある国際会議である International Computer Music Conference (ICMC) の東京開催において、実質的な開催母体となった。また、1995年度より、コンピュータ音楽を志す国内の音楽系大学生の作品発表・交流の場として実施しているインターカレッジ・コンピュータ音楽コンサートの支援を行い、コンサート付きの研究発表会として毎年共催で開催している。さらに本分野の啓蒙活動の一環として、コンピュータ音楽に関するチュートリアルを1997年より毎年実施している。

このように研究会活動自体は活発である一方で、国内の音楽情報科学に関する論文は、情報処理学会論文誌および電子情報通信学会論文誌等に分散して掲載されているため、当該領域における最新の研究成果を概観するのに不便をきたしている。本特集号は、計算機と音楽に関連した最新の研究や開発例を一括掲載することにより、会員に有意義な情報を提供するとともに、本分野の研究推進と発展に寄与することを目的として

企画を行った。論文募集に対して予想を大幅に上回る27件の投稿があり、そのうち、査読者とメタレビューの厳正な査読により、12件を採録とした。採録率は44%となった。当初の予定どおり、論文募集締切から8カ月後の2月号での掲載と、最新の研究成果を紹介することができた。採録が決定した論文は、楽音合成、歌声の生成、音価の量子化問題、リズム認識、演奏生成、演奏支援システム、合奏の演奏制御モデル、遠隔セッション、音楽検索、音楽の知識表現、音楽における電子透かし、インタラクティブアートなど、特集号にふさわしく音楽情報処理に関するさまざまな領域の論文を掲載することができた。芸術やコンテンツにかかわる領域であるため、情報処理学会の一般的な論文とは若干質的に異なっている論文もあるが、従来の音楽関係の論文で散見されていた音楽用語の誤用や不適切な使用法に関しては特に慎重にチェックを行うなど、音楽情報科学研究会の今後の指針を示す論文集として、結果的に良い特集号が構成できたと考えている。

今回の特集号では、今まで研究会等での研究報告がなかった研究者からの投稿もあり、研究者の開拓という点からも意義深いものになった。不採択となった論文の中にもユニークなものがあり、今後の研究成果が期待される。予想以上の論文が集まったこともあり、論文投稿の後押し、研究領域の活性化等の観点からも、2年に1回程度のペースで特集号を出していきたいと考えている。また、音楽関係の論文では、文章や図からではその価値を判断することが難しい場合があるため、音や動画等、紙メディア以外での投稿や論文誌への付録CD-ROMの添付等が可能となれば、より効果的と思われる。

「音楽情報科学」特集編集委員会

- 編集長
松島俊明（東邦大学）
- 編集委員（50音順）
小坂直敏（NTT）、片寄晴弘（和歌山大学）、平賀讓（図書館情報大学）、平田圭二（NTT）、堀内靖雄（千葉大学）、間瀬健二（ATR）

[†] 東邦大学